留学当時の思出（完）

臼井二尚

三

右のような考えを検討し是正する仕事を進めようとする頃には、夏も半ばに達したが、その頃ウィーンの尾高君から便りが来て、自分の研究がまとまりつつあり、完成の上はそれを Grundlegung der Lehre vom sozialen Verband と題する書物にして、Julius Springer から出版する事を考えている、ついては、君も現象学で学んだところを社会学に適用しての独文の書物を出版する計画を立てよと勧め、併しそれが為には、同君と同様に三年の滞独が必要であろうから、私の留学期間を一年延長せねばなるまいが、その一年のドイツ滞在費や出版その他に必要な費用は凡て尾高君が醵出しようという、思いもかけぬ提案が記されていた。この尾高君の熱い友情に感激して、私も然るべき研究をまとめてみ度いと思い、種々考えをめぐらし始めた。

社会学の樹立において大なる功績をあげたジンメルは、社会的現実態は人間の相互作用によって織りなされ、この相互作用はすべてなんらかの目的、例えば経済的利益・科学的知識等々の取得や授与の為に行なわれるが、同時にまたそれらは必ずなんらかの関係例えば競争や親和等において営まれる事に着目し、社会学を以て社会関係を基本範疇とする学なりとするとともに、この社会関係の研究にあたっては、右の相互作用における目的ないし内容と社会関係とを分離し、社会学は既に諸他の科学によって対象とされている内容を抜き去った関係の形式のみを研究する学であると規定して、形式社会学（formale Soziologie）を提唱したのであった。併しながら、例えば競争関係は必ず経済・学業・スポーツ・芸能等々のいずれかを内容とし、それをめぐっての競争であって、これら一切から切り離された単なる競争という無内容なものは、存在しないのみならず考えられもしない。ジンメル自身の社会学の論述もすべて内容と結びついた形式の論述であり、内容と結合して現実態を構成している具体的関係を縦横にとりあげながら論述を進めているのであるが、「形式」社会学の唱道の故に、彼の社会学は特に我国においては無意義無価値なものとして排斥を蒙る場合のあるのは、ジンメルの為に惜しむべき事である。

然るにジンメルは、社会学の方法論においてのみならず、他の場合にもまた社会生活の内容から離脱した形式の説を提示している。ドイツに社会学会が設立されて、それの第一回の大会が開かれた時、劈頭にジンメルが「社交（Geselligkeit）」と題する講演を行ない、それは同大会の報告書に収録されたが、後

にジンメルは『社会学の根本問題』を刊行し、それの第三章に、純粋ないし形式社会学の例として、右の社交論を再録している。これにおいてジンメルは再び社会生活の内容と形式との分離をとりあげ、相互協力・相互援助・相互対抗などの諸形式が、内容という根から一切解放された時には、それらは新しく独立の生命を獲得し、ただ諸形式そのもののための活動を営む。これが正に社交現象なのであると説述しているのである。

併しながら、社交の重要過程なる会話についてみても、それの重要な因子たる感嘆・賞賛・侮蔑・憤慨等々は、皆社会生活の重要内容たる芸術・競技・政治・経済等々と結びついて表明されるのであって、これらすべてから分離しそれらをなんら含むことのない社交的会話なるものがあるであろうか。否、社交的会話は現実生活における事実の報告・通達などの内容よりも、拡大され誇張された生活内容に充ちているのがむしろ通例であろう。併しまた社交における相互作用の内容は、現実生活の内容よりも縮小され矮小化されている場合もあり、種々改変変容され、更には現実生活には存在せざる別個の分子もあれば、現実には存在するものが社交では除去され欠如している場合もあるであろう。即ち、社交生活も常に内容に充たされており、その内容は実生活の内容と一致する部分があっても差支えはないが、必ずしも一致する必要はないのであって、この点において両者は明らかに存在の平面ないし次元を異にしているのである。現実生活ないし現実態の次元にあっては、万事が真実であり、これと異るものは虚偽または真偽不明のいずれかであるが、これと次元を異にする社交にあっては、真や偽やましてそれらの不明はなんら問われない。従って真偽によって拘束される事も無い。故に社交は真偽を離脱しそれを顧慮する必要のない自由を有する。

右によって明らかな如く、社交は現実態を離脱しており、この両者の差異はそれぞれにおける人間の意識にも差異を存在せしめる筈であるが、両次元の意識の差異を明確にするものは、現象学によって説述されている中和変容（neutrale Modification）と確信（doxa）の契機であると思われる。何事にも真偽の別のつきまとう現実態からこの別が滅却された次元への転位によって意識に変化を生ぜしめる事が、中和変容であり、また現象学によれば、現実態においては真実な事物の意識には必ず確信が伴い、虚偽の意識はこの契機を欠く。但し真実性には百%から零まで無限の段階があり、従って確信の契機にも種々段階や様々の差異がある筈であるが、これらの点の分析は現象学の将来の課題であろう。仮定（Annahme）の如きは、真偽を明確にし難い場合、特に真実なる可能性の大なる場合に、この事を認定しつつ樹立される命題であろう。

確信の欠如は実践活動の欠如と結合する。この事は、例えば社交において交わされる言葉には実行がなんら伴わない事、即ち社交場裡の言葉には実行に対する責任は少しも存在しない事に現れている。社交における実践の欠如は、社交の次元では中和変容によって真偽が滅却されている事よりして、当然の事である。実践活動は凡て真実なる事実を基盤としまた対象として

のみ可能になり営まれ得るのであるから、その基盤や対象が欠けまたは存否の不明な所では、実践活動は生じ得る筈は無い。中和変容によって言葉がその内容の実行実践を伴わない事を、相互作用の主体の双方が認知しあっている事が社交の前提であるから、実行実践に対して何らの義務も責任も無い点において、社交の言動は気軽であり気楽であり、従って自由であり暢びやかであり、故にまた楽しくもある。万事に真偽・責任・実行実践の着きまとう現実態の次元から、中和変容によって確信の契機を欠き従って自由奔放であり楽しく明るい次元への転位を明らかにしている現象学に、若しもジンメルが接していたならば、相互作用の内容からの形式の分離独立という無理な説明はしなかったであろう。

以上現象学の中和変容と確信の契機の理論を社交に適用しつつ述べたのであるが、社交と同様に現実態を離脱した次元での人間生活は他にも種々存在する。例えば遊技・演劇などもそれであり、右の社交について述べた事は皆これらにも当て嵌まる事は、改めて言うまでもない。劇場の舞台において俳優が悲痛極まる表情とともに己が子または愛人の胸を刃を以て貫かんとするに対し、観客はいずれも感動しながらも、誰一人として舞台に踊りあがって、その俳優の刃を奪いとるという行為を実行する者は無い。これは、俳優も観客も共に舞台上の演技が中和変容され、現実態を離脱した真実ならぬ真似事なる事を認知しているからである。

現実態の次元においても、真実性の度の低いほど確信の契機は弱まり、これが弱まるにつれて実行実践の生まれる可能性は減ずる。また実行実践はそれに対する意欲の大小ないし強弱につれて実現の可能性も増減するが、その意欲の大小はその実践行動によって実現するべき対象即ち目的の行為主体に対する価値の大小に対応すると同時に、その目的達成の行為の難易の度にも対応する。即ちいかに価値の大なる目的乃至対象も、それの達成に対する障碍が大なれば大なるほど、それの達成への意欲は減退するであろう。その障碍が餘りにも大なるが故に、その目的乃至対象の達成を断念せざるを得ない場合にも、猶それの達成への意欲が断ち切られぬ場合には、遂に意識が中和変容されて、現実を離れた想念の世界において、それの実現が種々描かれる。それは現実離脱の点においてサロンや劇場における人間の営みと等しいと言うべきであろう。

右の考察は人間一般についてのものであるが、現実社会における人間の相互作用についてみれば、事態は更に複雑になる。例えば、相互作用を交わす一方の主体のみが現実を離脱し、他方はそれを知らず、みずからは現実の次元に止まっているという場合もあれば、また特に若年層には、現実態とそれが中和変容された次元との別のある事を明確に悟るにいたらず、現実と夢とが未分化の状態にある者も少なからず、更には現実態の或領域のみが中和変容され、その領域に関する一切の言動は確信を欠き実行実践を伴わぬというような特殊な人間もあり、一層進んで、特定領域の中和変容の故に、現実の次元にある実行実践の力が低下しているというような者も存在する。この種の者

と全生活が現実態の次元に在る者とが相互作用を交わす事を続けている場合には、種々の紛糾・衝突の生ずるのは当然であろう。

右に略説した種々の場合が如何なる社会事情から生まれ、どのような問題を生み、どのような様相を呈するかを、これらの諸々の具体例に富む現実社会の分析によって解明する事は、社会学に対する現象学の適用の一例となるであろうと私は考えた。同時にまたこの分析にあたっては、上記の如く、分析の対象となる社会を写実的に描いている文芸作品があって、描かれている人間や社会関係の類型が拡大ないし高揚された姿において展示されている事が望ましいのであるが、兎に角問題の中心は中和変容によって確信の契機を抜きにした意識の次元に生きる人物である。斯かる人物は現実態を離脱しているので、言葉に行動が伴わない。即ちその人物が如何に慨嘆・嘲罵・攻撃・決断等々をしても、それらに対応し継起すべき実践活動はなんら生じないのであるから、現実態には些かも変動は生ぜず、彼の言動によって現実態はなんらの痛痒も感じない。現実態にとっては彼は有って無きに等しく、彼の言動は現実態には役に立たぬと同時に大して迷惑にもならないので、彼は現実態よりすれば無用者であり余計者である。このような余計者が例外的にではなく広く簇出し、彼ら同志また現実態を離れる事のない人々と種々の相互作用を交えていた社会があれば、斯かる社会こそ正に私が分析考察の対象として取り上げるに好適な社会であろう。ところで正にこのような社会が現実に存在した。それは十九世紀半頃のロシア社会である。

十九世紀初頭に即位した露帝アレクサンドル一世は、いくつかの自由主義的改革を行なった。これと共にロシアにはさまざまな文学的・政治的団体が生じ、それぞれの特殊な立場に立って、自己主張をくりひろげた。この風潮はナポレオン戦争の勝利の後の民族的自覚によって一段と勢を増し、ロシアの現状への批判、特に農奴制と専制政治に対する反感と自由への憧憬が強まった。この風潮を弾圧せんとして反動政治が強化され、秘密警察の網が張りめぐらされ、出版物の検閲・文章の削除やおきかえ・出版禁止等々の強硬策が執られた為に、上層知識人の多くは無力感に陥り、卑屈・無気力・空しさの感じをまぎらわす為に、意識を中和変容して、サロンにおける社交場裡で空しい評論談議を重ねる者が多くなったが、飽くまで警察国家との妥協和解を不可とする若い士官達を中心として、革命を目指す秘密結社が結成され、その中には皇帝暗殺を企図する者もあった。彼等は一八二五年十二月に事を起こしたところから、デカブリストと呼ばれるが、彼等は脆くも破れ、政府はこの貴族階級の精華とも見られた人々を、死刑や凍土地帯への流刑に処した。同時に言論の自由は全く圧殺され、国家社会の不正や醜さの摘発批判は徹底的に取り締まられ、斯うしたものは片端から摘発され、全人民は言論の自由を全く奪われ、国家社会の改新変革を論ずる事は即ち身の破滅を意味した。貴族青年達は手も足も出せなくなり、自分達は結局何も為し得ないという思いに沈み、自分達を押し潰そうとする環境との命がけの闘いに挺身せんと

する市民的勇気を喪失し、何となく力尽きて了ったという恰好になった。彼等は自己を包み韜晦して、自己の希求の実現をただ空想の中に、即ち中和変容された意識の中においてのみ描きみるのほかはなくなった。斯うして現実態から離脱した者達の行動に連なる事無き談論は、現実態にとっては何らの意義も無く、従って彼等非行動的人間は正に現実態にとっては余計者無用人に過ぎず、斯かる余計者の輩出は明らかに当時のロシア国家の反動的専制政治の罪によるものと言わねばならない。これらの余計者は国家革新の為に行動の実践を起こし度き念願に燃えながら、国家による弾圧の故に已むなく無為の状態に止まっていた者であるが、これと等しく国家革新社会改変に対しては無為でありながらも、現実離脱の為に意識の中和変容を行なう事は少しも無い儘の余計者もある。これは農奴制の上にあぐらをかいて安住し、自己の一切の用事は召使をして足さしめ得るので、一挙手一投足の労すらもみずからする必要は無いが故に無為なのであり、現実社会の進展改善には全く無関心であるという点で余計者であるというともがらである。此の種の余計者は国家社会の改革の熱意に燃える者達がいかに笛を吹いても全く踊ろうとしないために、笛を吹く者達が気落ちし余計者と成るのを援けるところのあった事は推定されよう。

扨て、以上略述した余計者を扱っている文芸作品があるかと云えば、十九世紀中期のロシアの作品にはこの種のものが多く、しかもその中には文学史上重要な地位を占めているものも少なくない。ロシア文学はプーシキンに初まるとして、文学史の叙述をプーシキンから始める学者もあるほどであるが、プーシキンの主著は『オネーギン』であり、このオネーギンは正に余計者の一代表である。此の作では主として現実を離脱して美辞麗句を弄ぶ余計者と、現実態を離れる事のない乙女との交渉が描かれている。次いで著されたレールモントフの『現代の英雄』は、魂の中に無限の力を感じ、国家の圧制に対する戦いへの渇望に燃えながらも、その渇望に添った行動に出ることが出来ず、為に内に鬱積する瞋恚・忿懣・悲痛から、世のあらゆるものを無意義・無価値と観じて、無視・蔑視する余計者の否定的側面を描いている。ツルゲーネフの『ルーディン』・『貴族の家』・『その前夜』・『煙』・『処女地』などの諸作は、いずれも特殊な点から余計者に光を当てている。ルーディンは徒らに空言のみを事として実行の力に缺けた理想家肌の余計者で、人から人へ・事業から事業へと転々と移り歩いたが、それらは凡て現実離脱の次元における動きに止まったのは、ロシアにおいては自己の理想の実現の為の実践活動が全く不可能な為であり、此の事を痛感した彼はロシアを去り、革命活動の実行されつつあったフランスに赴き、ここで初めて余計人たるを脱して行動実践の人となって、パリのバリケードの上で赤旗を振りつつ飛弾に斃れて生涯を閉じた。『その前夜』では、女主人公エレーナは行動的な善を渇望していたが、彼女と交わるロシア男性はいずれも優秀な感受性の豊かな人々であり、立派な理論や優れた評論を展開するのであるが、いずれも実践活動の前で止まり、それから先には進まない。この点でエレーナは不満を感じ、誰と

も結ばれずにいる時に、言葉が確信を含み行動と結合している人物が現れた。併しそれはロシア人ではなく、トルコの軛の下に喘いでいるブルガリアの男性であるが、この人物が祖国の解放の為に考え論ずるところを実行してゆく点に魅せられて、エレーナはこの外国人と結ばれて、共にロシアを去る。併し間もなく夫は世を去るが、真実な行動はいかなる所にも見られず、新しい生活の風潮に接する事もなく、疲憊しながら枯れしぼんで行くという拷問に己が身を運命ずけるほかはないロシアには彼女は帰らないのである。『処女地』のネジダーノフはハムレット的な余計者であるが、女主人公マリアンナは情熱的で、自己の信念に対して勇敢な女性であり、ネジダーノフは此の女性と交わりを続けるうちに、次第に相手の飽くまで現実態を離れる事なく、理想の社会に対する固い信念・確信を原動力としている実践的態度に化せられて、現実態の次元に足を踏み入れ、捕吏に狙われる身となった時に、本来自分はなんら確信する事なく中和変容の次元で扱っていた事業に行動を以て参加した事を悟って、愕然として驚き、自分の信じない事業の為に捕われの身となって、汚辱の境涯に身を沈めるに堪えず、「信じてはいない！信じてはいない！」と叫び、胸に拳銃を当てて自殺をした。この「信じてはいない！」という言葉こそ、正に端的明確に、余計者とは確信の契機を欠き中和変容された現実離脱の次元に生きている人間なる事を示す明証であると認められよう。但し一八七七年に刊行された此の小説には、右の余計者と共に、なんら意識を中和変容する事無く、不撓不屈の実行力を以て、自分自身の信ずる建設の道を静かに歩んで行くソローミンなる人物も描かれている。無用者のもう一つのタイプ即ち意識の中和変容無き儘の余計者を克明詳細に書き綴っているものには、ゴンチャロフの『オブローモフ』がある。以上のほかに猶余計者の登場する作品が多数あるのは言うまでもない。同時にまた卓越せる評論家達の余計者に関連する重要な著書も少なくないが、これら凡ては今ここでは割愛せざるを得ない。

ところで、右の諸作のそれぞれが、当時のロシア社会の人物を忠実に描写しているのではなくて、面白おかしさを旨として、重要な諸点を落とし、ありもせぬ事柄を附加している作り話であれば、社会科学にとっては有害無縁の物に過ぎないが、この点は如何かと云えば、これらの諸作品はいずれもロシアに写実主義が確立した時期のもので、いずれも当時の余計者を空想的附加物無しに叙述している。当時のロシアの評論家も現代のロシア文学史家も、プーシキンはロシア文芸の写実主義を確立し、当時のロシア国民生活との結びつきの深さまた内容の豊かさにおいて第一人者であり、現実性に貫かれているとしている。次に現れたレールモントフの『現代の英雄』も写実主義の優れた達成であると言われ、ゴンチャロフの『オブローモフ』は、観察が深刻で、現実描写の克明さの優れた作品であり、記されている余計者の無気力・無為の姿は、時代を超えた歴史的権威を有っていると評されている。ツルゲーネフの初期の作品『猟人日記』は、当時のロシアの農奴の生活状態をまざまざと描き出しており、その故に農奴解放の大きな動力となった事は、周知

の通りである。その後連続的に出された彼の諸著は、当時のロシアの教養ある階級の代表的人物の大陳列場の観を呈していると言われる。

併しながら右のように称えられる写実主義は、決して現実態の一切を只あるが儘に機械的に正確詳細に写し出した写真のような叙述をしているのではなく、有意義な最も本質的な諸点を選び出し、それらを鮮明に照らし出し、高めながら集約して、一個のタイプを構成しているとか、現実社会のおもな特質の芽生えをとらえ、それらの成長を想見して、それらを正しく結合して、典型を形成しているなどと評されているが、これは正に上記のウェーバーの理念型の構成作業なる主要な特質の観念的上昇と矛盾無き調和体への結合を、これら写実主義の文芸作品が芸術の世界でなし遂げている事を示すものであると言えよう。

以上素描したような特質を有つ十九世紀中葉のロシア社会は、現象学の一端を適用しての社会学的研究の対象として好適ならんと私は感じ、重要なロシア文献の独訳を集めながら、果たして自分がこの研究で一書を成し得るかどうかの見通しを立てる仕事を、従来の研究の傍流として始めた。ところが、夏になって大学も休暇に入る頃、私は胃の不調を感ずるようになった為に、夏休み中のもくろみとして立てていた旅行の計画を破棄して、休みを健康の恢復に当てるべく決心した。たまたま、日本には全く無いが、薬は一切用いず、ただ患者に適合する食物を与える事によって治療するホテルサナトリウムなる施設を勧める人があって、その勧めに従い、チロールのインスブルックの東南五粁程の台地に位置するイーグルス（Igls）にあるこの種の施設に入る事に決めた。入ってみると、病人らしい者は殆ど居らず、休養の為に有給休暇を過ごす独・墺・仏等の人々が主で、その中にはかつて革命の為にドイツに逃れ込んだロシア人も居た。私はこういう人々と語り合いながら、哲学書と平行にロシアの十九世紀の小説や評論を読み初めた。

四

一九三一年（昭和六年）の夏も過ぎて九月も半ばになる頃には、私の健康も順調に恢復したので、ミュンヘンに寄って再びフライブルクに帰り、三宅さん大小島氏との共同研究に戻った。私のロシア研究完成の見込が立ったので、私の留学の一年延長が許されるかどうかを、小西先生に問い合せた。これは社会学の担当を兼ねておられた藤井先生が病歿されたので、同先生と親しかった小西先生宛てに、尾高君の従遡を記して、滞独延長の可能性のお伺いをしたのであるが、それに対する返事は、延長はとんでもない事で、京大は君の帰学の一日も早からん事を望んでいるというものであった。これで滞独一年延長の夢は見事に粉砕された。それで私もフライブルクでの研究を整理し纒める事に専念せざるを得なくなった。間もなく三宅さんはフライブルクを去って、ベルリンに向った。私はフッサールから私が特に学び度く思う諸点について教えを受けフ市に残って、又フランスで頼るべき人としてのレヴィー・ブリュールへの紹介状を頂いた。ハイデッカーには社会科学の概念構成について、

直接御高見を仰ぐ為に御宅に伺い度いから、御都合のお知らせを乞う旨の手紙を出し、返事に指定してある日に出掛けて、上記のリッケルトに初まり、マックス・ウェーバーから現象学を経て、再びウェーバーに戻った自分の考えの移り行きを述べて、これに対するハイデッカー自身の忌端なき意見を示して頂き度い旨を述べたところ、私の言葉を黙って聴いていた同教授は、君の考えは正しいと思うという簡単明瞭な返事を与えられた。私は同教授の Sein und Zeit を読了した時に、論旨はよく分かり、別に難点は無いと思った。従って、同書に豫告してある「今日迫の存在論の破壊」の仕事は間もなく書物に成って出る事と期待していたけれども、面会の節には私の話が長くなったので、右の存在論の問題には触れる事なく辞去したが、私の期待した書は遂に出なかった。これが出れば、ハイデッカーは古今を照らす大金字塔を樹立する事になったと思うが、私の期待はそこに存する種々の難問を知らない門外漢の夢なのであろうと思う。

いよいよフライブルクを後にして、私は先ずハイデルベルクに赴いた。ここの大学にはまだリッケルトが講義をしていた。併し既に老齢故に脚が弱り、教室内でも杖をついていたのが痛痛しく感ぜられた。講ぜられた事柄は意外にもかつて日本で読んだ事柄と同様な価値の論であった。この老教授と論を上下する事は断念し、次の時間にあったヤスペルスの講義に出席した。講義は論理学についてであったが、実に明晰な、それ故理解し易い講義であって、正に名講義の名に値するものと感じた。講義の後で同教授の研究室に入り、簡単な自己紹介の後、一度御宅にお伺いして御高教を仰ぎ度いから、御都合の良い日時をお示し願い度いと述べた。少時考えた後に或日を指定されたが、洵に残念ながら、私の豫定では、その日にはもうハイデルベルクには居ない事になっている。已むを得ずその事を述べて、その席で簡単に私の考えを述べるから、それに対して御批判を賜わり度いと云って、先にハイデッカーに対して述べた事を繰り返した。これに対して先にハイデッカーが言ったと同様の事が言われた。私は当時のドイツのみならず世界一流の哲学者二人から、自分の考えを是認された事で、大なる安心を抱き得た。

ハイデルベルクの大学には当時マックス・ウェーバーの弟アルフレッド・ウェーバーが健在で、教授活動をしていた。この人は兄とは異なり、歴史社会学的な一種の綜合社会学を展開していた。綜合社会学の時代は過ぎたと信じていた私は、同教授の研究室を訪れたところ、折よく在室中だったので、教授の社会学について論難を加え始めた。すると教授は室内に居た二三の助手達に向かい、この人は私の考えに大部異論があるようだが、私はこれから行かねばならぬ所があるから、君達がよろしくこの人の相手をしてくれと言いおいて出て行った。私は助手達と少時論じ合ったが、話はうまくかみ合わぬので、打ち切って大学を去った。

私はレーヴィット氏を訪ねたが、惜しい事に氏は旅行中で会えなかったので、私は自分の名刺を置いて辞去した。この人はその後のドイツの国状の転変によって、トランク一つを持って

イタリアに移り、更に日本に来て、東北大学で四年間講師を勤めた。私は仙台に行った機会に同氏を訪ねたところ、氏は私がかつてドイツで氏の宅に置いて来た私の名刺を私に示したのには驚いた。私は若輩の私がまだ十分に究めるにいたらない社会学の主要問題については、それに特に造詣の深い学者を京大に招いて、集中講義をしてもらう計画を立て、最初にレ氏に社会思想史の講義を依頼した。こうした縁でレ氏夫妻と夏休み毎に四日許りの旅行を共にした。この旅行中は私が主として日本社会の特質を語ると共に、その特質のよって来たるところについての私の見解を述べて、氏の批判を乞うのが例であった。

私はフランクフルト・アム・マインでは、ユダヤ人が解放された当時の儘で保存されている Getto（ユダヤ小路）を訪れ、その狭隘な地域内に閉ぢ込められて幾百年を重ねたユダヤ人の生活が、いかに惨苦に満ちたものであったかを直観的に把握し得て、強烈な印象を与えられ、また日露戦争に際して日本を経済的に支援してくれた二大財閥の祖先が一軒の家を二分して、その半分ずつに軒を並べているのにも、特殊な感慨を禁じ得なかった。このゲットオは第二次大戦の際に灰燼に帰したらしいが、若しそれが事実だとすれば、痛惜の至りである。私は更に知識社会学者マンハイムを訪ねた。壁はすべて書物に被われている書斎に通されたが、この人物は頗る大家らしく構えて、こちらの言う事などには耳を傾けず、後進国の若者に高教を垂れるというような態度が強くて、話にならぬので、忽々に退参した。この種の人間の型については思うところもあるが、今は略す。

次に私はウィーンに赴き、尾高君によってケルゼン及びその周辺の諸学者に紹介された。その中には最近になって日本の社会学者がとりあげ始めたシュッツも居た。此処から私はチェコのプラーハに赴き、上記のホテルサナトリウムで知り合いになったプラーハ居住の人に市内を案内して貰い、転じてライプチッヒを訪れ、聴講生で満員の大講堂でのシュプランガーの講義その他を聴いた。またその頃大部なロシア文学史を出したルターが此の地に居たので、同氏に面会して種々語りあった。ついでにワイマールに行って、ゲーテとシラーとの仕事や交友の跡を訪ねた。その頃既に年は暮に迫っていたが、ドレスデンに寄って、ラファエロのマドンナに大なる感銘を与えられ、ベルリンに入った。

ベルリンでは早速三宅さんに会った。その時私はハイデッカーやヤスペルスに会った時の話をした。三宅さんはそれに対して、それでは君は二人から免状を貰った訳だねえと言った。ドイツで大学に社会学の講座が設けられたのは、日本より遅く、第一次大戦の後で、ベルリンとケルンとに一講座ずつ出来た。ベルリンの教授はフィーアカントであり、その社会学の主著には哲学的社会学という副題が附いていたが、既に京都で通読したところでは、特に哲学的なところは無く、ジンメルの考えを踏襲してはいたが、ジンメルとは異なり、主として自分が多年研究してきた民族学から資料を採っていた。大学の研究室に突然訪ねたところ、快く迎えてくれ、話が大いにはずんだが、ま

だ話し足らず、更に西郊の自宅を二回訪ねて語り合った。その時私は特に、社会学は理念型を構成して、これを用いて現実態を認識するほかはないが、人間の社会生活のあらゆる領域での主要な特質は、皆、古来芸術家が博捜選出し、それらを拡大し上昇せしめて、矛盾の無いように結合して、明瞭多彩な意味構成体を構成し、それらを縦横に活動させているので、社会学の理念型の構成や活用には、大いに芸術作品を利用し、それから資料を仰ぎ教えを受けるのが、正当であり賢明なやり方であろうという意見を陳述したところ、氏はこの考えに大いに賛意を表明してくれた事は、私にとって洵に有り難く嬉しい事であった。

この頃世界経済史に永く残る大恐慌が初まっていた。特にドイツでは失業者数四百万と伝えられ、週末毎に失業手帳を有つこれら失業者に失業手当てを支給せねばならず、他方では連合国に莫大な賠償金に代わる現物を提供せねばならないので、国家の艱難は日々に高まるという状態で、何となく物情騒然たるものが感ぜられた。私は左翼の若者の案内で貧民窟とされる所を視察したが、併しそこの状態は、案外に悲惨という程には感じられず、伝え聞いていた大阪の細民地区より遙かに優ると思われたが、これは社会保障が進んでいる事によると考えしめられた。国民の大部分は社会民主主義の立場にあったが、ナチスと共産党との抗争が激化しつつあって、その帰趨はまだ不明であった。時恰も大統領選挙が迫まり、投票日の一ヶ月前から選挙運動の火蓋が切られた。それの第一日目に共産党は労働者の多いルール地方で、ナチスは首府ベルリンで、候補者たるそれぞれの党首が第一声をあげるとの事であったので、私はヒットラーの獅子吼を、通称収容人数五万人と伝えられるシュポルトパラストで聴いたが、その時にはミュンヘン訛りの交る彼の演説よりも、前座をつとめた後の宣伝相ゲッベルスの演説の方が上だと感じた。

その頃三宅さんは既にパリに移ったが、私はケルンに赴き、そこの大学の社会学研究室を訪ねたけれども、ウィーゼ教授は不在だったので、助手連と語り合ったのみで、同市在住のホーニッヒスハイムその他を訪ねて面談した後、最後にボンで、かつて Sein und Zeit を読み合ったベッカー氏宅を訪れ、夫妻にお別れの挨拶をして、私もパリに向かった。

五

パリ滞在は長くはなかったが、フランス人の家庭生活も観察し度く思い、三宅さんの居る外国人相手の下宿には入らず、普通のフランス人の家庭に入った。パリでは先ず凱旋門の近くのレヴィー・ブリュールを訪ね、突然のこと故、それまでの自分の勉強してきた事柄について述べ、豫め氏の都合の良い日時を伺った。その指定された日には、当時のフランス社会学の主要な文献を網羅している書物を持参し、その中で氏が私にとって重要と考える書物を指示すると共に、それぞれについて簡単な解説と批評を与えて下さるようお願いした。氏は快く私の乞いを容れて、氏が良書と考えるものの一々について、それの特徴

を説明し、評価を示してくれた。当時フランスの人文科学界で最高の地位にあったのはベルグソンであって、学会会長・雑誌発行者などの要職を占めていたが、氏は久しく病臥の身なる為、凡ての事務はレヴィー・ブリュールが代行していた。この老大家レ氏が東洋の若輩を全く同輩として扱い、懇切丁寧に教示を与えられた態度には全く頭が下がった。思い掛けずも異国フランスの初対面の大学者が、今日にいたるまで私が最高の尊敬と感謝とを抱いている少数の偉い人の一人となった。

パリには人文科学の老大家のみを会員としている学術団体があり、それの会長はベルグソンであったが、病臥中の故にレヴィー・ブリュールが会長の代行をし、会務を司っていた。たまたま私がパリ入りをして間もなくこの団体の研究会があって、レ氏はその会に私を招いてくれた。会の最初に私が既にその名を知っていたシミアン氏が、新たに会員に選ばれたとして紹介されたので、氏の如き大家が漸く今会員になったのかと、私は少々意外な思いがしたと共に、自分の如き末輩が大変な会に出席した事を意識した。次いで、ジュネーブの国際連盟事務局に勤めている人がこの連盟について講演をした。当時はまだこの新しい機関によって、戦争を回避し、世界の平和を維持し度いという願望・期待に諸国が燃えていた時期であり、そのことが講演の中にも感ぜられた。それから後がまた大きな驚きであった。日本の同様な老大家の集いでは、互いに社交的辞令を交わすのみらしいと思っていたが、パリのこの会では一人一人の大家がその講演の内容を旋って、極めて熱烈に自己の見解を述べ立てるのであった。レヴィー・ブリュールのような温厚な人も口角泡を飛ばさんばかりに論じ立てたのには、感服するのほかはなく、日本でもこの会のように老大家が論じ合うようにならねばならぬと思ったが、それから半世紀以上を経た今でも、フランスの真似はできない点で、両国間に根本的な相違のあるのを認めしめられる次第である。

私はパリでは更にブーグレー、モース、フォコンネーなどの社会学の現役教授と会談したほか、かつて社会学の講師として京大に来る筈であって来なかったコワレー氏を探して面会した。七ヶ国の言語を操るとの事で、私にも君の好きな言葉で話せとの事であったが、私はドイツ語にした。氏は京大講師の件については餘り話したがらぬ様子だったので、オッペンハイマーの社会学をとり上げ、それの綜合社会学的性格について論じたところ、君の言うようなところもあろうが、あのように大著を次次に著すエネルギーは大したものではないかと弁護した。この人はその後社会学では名を挙げなかったが、哲学では立派な業績を挙げているとの事である。

大学の正門の所にコントの大きな像が立っており、今でもコントの名は学者の談論の中に時々出る事からも、コントがフランスでは相当重んじられている事が察せられるが、ペール・ラシェーズのコントの墓は、古くて立派な彫刻のある堂々たる墓も少なくないのに比して、小さく粗末なものであるのは意外であった。大学の講義に時々出席する間に、ルーヴル美術館にも入ったが、前回見た室の次の室から見るようにして、絵画の部

を見終えるのに十日近くもかかったのには、さすが世界第一の美術館と感心した。一番深い感銘を与えられたのは、第一室に在るレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」である。ミラノの「最後の晩餐」が「ひどく傷められて」いるのに対して、モナ・リザは昨日描きあげられたように瑞々しいのも有り難かった。ダ・ヴィンチはこの絵もまだ完成せずとしていた由であるが、固じルーヴルにあるダ・ヴィンチの半ばにもいたらぬ未完成品でも、他の一流の画家の完成品以上に心を打つものがあった。この事のよって来たるところについては、種々考えられるが、玆に記す事はすべて略する。

イギリス滞在は一週間にも満たず、特別に学者と会う事も無かった。これは一つにはイギリスには社会学の講座は無く、専門の社会学者も居なかった事にもよる。ヨーロッパに別れを告げ、アメリカに向うべく乗船したのは、当時世界最大の姉妹旅客船の一つブレーメン号であった。この船では三宅さんと一緒であった。前年（昭和六年）に日本は満洲を制圧し、中国占領をも進めつつあった。船中で発行される小新聞は、上海事件による白川大将の死を報じた。アメリカで学者に面会すると、先方が先ず「我々は政治の問題は抜きにして話をしよう」と言ってくれ、その心遣りを嬉しく思った。アメリカに上陸して二三ヶ所巡ったのみで、この国の広大にして豊富なるに心を打たれ、こういう国を相手にしての戦争などは、到底問題にならぬと思われた。コロンビア大学ではマッキィーバー教授を訪ね、助手が先生は今日は確かに大学に見えたと言って、電話で方々探してくれたが、遂に居所不明で、会えなかった。シカゴ大学ではバージェス教授に面会し、私は大学で二年生の時の講読に、同教授と同僚のパーク教授との共著を用いた事を語り、その後の同教授の研究、特に現在のそれについて伺った。ロスアンゼルスに出ると、間もなく始まらんとする米国での第一回オリンピック大会の会場の整備が大分進んでいたが、開始を待たずに浅間丸に乗って、日本に向かった。この船でも三宅さんと一緒であったのみならず、尾高君の一家とも一緒であった。この船にはドイツ人は一人も居なかったが、尾高君の子供姉妹が完全なドイツ語を語るので、私達は久しぶりに生粋のドイツ語を聴き得る事を喜んだ。船が横浜に近づくと、空は雲に蔽われ、雨がシトシトと降り出したので、ヨーロッパ上陸以来雨に遭う事なしに過ごした外国留学が終った事を明確に感ぜしめられた。

（筆者　うすい・じしょう　京都大学名誉教授
〔文学部、社会学〕）